准教授　**髙橋　晃一**　TAKAHASHI, Kouichi

1. 略歴

1991 年 4 月　東京大学教養学部文科三類　入学
1993 年 4 月　東京大学文学部印度哲学専修課程　進学
1995 年 3 月　同　上　卒業
1995 年 4 月　東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻修士課程　入学
1998 年 3 月　同　上　修了
1998 年 4 月　東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻博士課程　進学
2002 年 3 月　同　上　単位取得退学
2002 年 4 月　東京大学大学院人文社会系研究科　助手（～2005 年 3 月）
2004 年 9 月　博士（文学）（東京大学）
2005 年 4 月　東京大学大学院人文社会系研究科　学術研究支援員（～2005 年 9 月）
2005 年 10 月　日本学術振興会海外特別研究員（ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所）（～2007 年 9 月）
2007 年 10 月　東京大学大学院人文社会系研究科　学術研究支援員（～2008 年 3 月）
2008 年 4 月　東京大学大学院人文社会系研究科　特任研究員（～2012 年 3 月）
2012 年 4 月　筑波大学大学院人文社会科学研究科　助教（～2013 年 3 月）
2013 年 4 月　東京大学大学院人文社会系研究科　特任研究員（～2017 年 3 月）
2017 年 4 月　東京大学大学院人文社会系研究科　准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

（1）　インド仏教の論書研究
（2）　チベット撰述の注釈文献に関する研究
（3）　サンスクリット語およびチベット語文献の XML によるマークアップ方法の研究

b 研究課題

（1）インド仏教の文献は、大きく経・律・論の三つの分野に分けられる。そのうち、論は仏教思想家が著した哲学文献であり、論書と呼ばれる。この論書を主な研究対象としている。特にインド大乗仏教の一学派である瑜伽行派の論書を分析し、その思想形成の過程を考察している。この学派の思想は唯識思想として知られているが、最初期の文献では唯識思想は説かれず、モノの実在を前提にして思想が構築されている。この最初期の思想形態の分析と、唯識思想へ展開した過程を解明し、仏教における唯識説の意義を考察することを課題としている。特にこのような哲学的思想と、菩薩としての倫理的実践に関る六波羅蜜の関係に着目して、瑜伽行派の思想を包括的に明らかにすることを目指している。

（2）（1）と関連して、チベット人によって著された瑜伽行派文献に対する注釈書の内容分析を行う。近年、発見・公刊された『カダム全書』という著作群には瑜伽行派文献に対する注釈が数多く含まれており、その内容の解明は喫緊の課題となっている。特に瑜伽行派の思想との関係では、唯識思想の大成者の一人であるアサンガ（5 世紀頃）の著作『阿毘達磨集論』に対して、『カダム全書』には十数点の注釈が収録されている。現在、その全容を解明するために調査している。

（3）こうしたテキスト分析に関しては、電子化テキストによるデータベースの作成が効率の良い方法と考えらえる。近年では XML を用いたテキスト分析が盛んに行われるようになってきたが、既存のガイドラインである TEI:P5 は、サンスクリット語およびチベット語の仏教文献の分析に関しては、改良の余地がある。実際に文献をエンコーディングしながら、具体的な問題提起をすることを目指す。特に（2）と関連して、『阿毘達磨集論』の複数の注釈を分析するためのテキスト・データベースの構築作業を行っている。

c 概要と自己評価

『カダム全書』は近年になって発見・公刊されたもので、カダム派をはじめとするチベットの学僧が残した著作が数多く収録されているが、その全体像は明らかになっていない。2020 年度までは科学研究費基盤（B）の助成を受けて基礎的な調査を行い、それを引き継いで 2021 年度からは科学研究費基盤（A）の助成により、『カダム全書』所収の『阿毘達磨集論』の複数の注釈を整理し、より綿密な分析を行っている。この調査を通じて、『カダム全書』所収のチベット語文献資料が、インドの仏教思想の問題点を探るうえで重要な視点を提示するものであることが明らかになってきた。

そもそも研究対象である『阿毘達磨集論』は、サンスクリット語では「アビダルマ・サムッチャヤ」という。この「アビダルマ」という概念は、本質的には「無漏の智慧」を意味するものであるが、通俗的にはその智慧を獲得するための方法を説く論書がアビダルマであると解され、その結果、アビダルマは論書であるという理解が通説となっていた。これはインドの古典文献にみられる解釈なので、ある意味では正しいが、現代の研究者は後者に重きを置き過ぎたため、アビダルマの本来の意味を考えることから遠ざかってしまった。しかし、チベットの学僧であったチョンデン・レルティ（13 世紀頃）は、むしろアビダルマの本質的な意味である「無漏の智慧」を再考し、核心に迫る解釈を示した。すなわち、無漏の智慧は独立して存在するようなものではなく、人間として活動する修行者に備わる本質であり、仏道修行に励む人間から離れた、抽象的な「智慧」というものはあり得ないことを明らかにしたのである。このように、インド仏教の本質に触れる解釈が、『カダム全書』所収の文献を調べることで明らかになった。

また、特任研究員の協力を得て、このようなチベット語の注釈文献を XML で構造化し、チベット仏教文献に特有の詳細な段落構成を忠実に分析するための手法を、TEI ガイドラインに基づいて提案している。これらの成果は主に業績にあげた著書において公開している。

d　主要業績

⑴　**著書**

編著、高橋晃一・根本裕史、『『阿毘達磨集論』の伝承：インドからチベットへ、そして過去から未来へ』、文学通信、2021.3

⑵　**論文**

高橋晃一、「唯識思想における他者」、『哲学』71、96-106 頁、2020.4

⑶　**学会発表**

国内、高橋晃一、パネル企画「『阿毘達磨集論』の伝承 ―インドからチベットへ、そして過去から未来へ―」、日本印度学仏教学会第 71 回学術大会、2020.7.5

国際、Takahashi Koichi、”The Inexpressibility of the Vastu in Early Yogācāra Philosophy”、2020 Virtual Annual Meetings of SBL and AAR、November 29–December 10，2020.12.8

⑷　**書評**

『大乗荘厳経論』研究会、『『大乗荘厳経論』第 II 章の和訳と注解―大乗への帰依―』（龍谷大学仏教文化研究叢書 40）、『インド学チベット学研究』24、317-323 頁、2020.12

⑸　**監修**

斎藤明／丸井浩／下田正弘／蓑輪顕量／梶原三恵子／高橋晃一／加藤隆宏、『仏典解題辞典』、春秋社、2020.12

⑹　**研究テーマ**

科学研究費補助金、基盤（B）、高橋晃一、研究代表者、「『阿毘達磨集論』に対するチベットの注釈伝承に関する XML によるテキスト分析」、2018.4～2021.3

科学研究費補助金、基盤（A）、高橋晃一、研究代表者、「『カダム全集』所収『阿毘達磨集論』注釈群の XML 電子テキスト構築」、2021.4～2026.3

3.　主な社会活動

⑴　**他機関での講義など**

非常勤講師、大正大学

非常勤講師、武蔵野大学、「人間倫理特論」

非常勤講師、放送大学、「仏教思想―原典に学ぶ」

講演、「唯識思想における他者の存在」、第 625 回武蔵野大学日曜講演会、2021.11.21

講演、「『瑜伽師地論』の伝承について」、第 52 回オープンセミナー・東京大学ヒューマニティーズセンター（オンライン）、2022.1.28

⑵　**学会**

日本印度学仏教学会、評議員、常務委員

仏教思想学会、幹事

東方学会

日本チベット学会

日本南アジア学会

International Association of Buddhist Studies

Japanese Association for Digital Humanities